〈研究ノート〉

生活支援ツールを介した対話による限界集落住民への支援

――文献研究を通した支援方法の構想――

御　前　由美子*，安　井　理　夫**，小榮住　まゆ子***

Support for residents of marginal settlements through dialogue mediated by a life-enhancing tool Concept of support method through a review of previous research

Yumiko Misaki, Michio Yasui and Mayuko Koezumi

要旨：「限界集落」というスティグマを住民の側から問い返すためのひとつの方法として、生活支援ツールによる「生活」のビジュアル化が考えられる。このビジュアル化により、これまでとは異なるイメージにもとづいて自身の生活について語ることができ、また、ナラティブ・アプローチを併用することで、さらに幅広く「生活」にアプローチすることができる。その方向をさらに推し進めると、身体的感覚や共感をてがかりとした限界集落の住民の汎神論的な世界観や自然への共感、生き方の知恵の発掘などをとおして、支援者側も賦活（既製の生活や世界観からの解放あるいはエンパワメント）され、その連帯感が住民の自己肯定感を高め、スティグマをはね返すことにも寄与するようなセルフヘルプ的な協働あるいは支援が構想される。

Abstract: One way residents can counter the stigma of living in a “marginal settlement” is by visualizing their “way of life” with the help of a life-enhancing tool. Through this visualization process, residents can talk about their lives with a new perspective. By combining this method with a narrative approach, it is possible to examine their “way of life” from an even wider perspective. Further, through such an approach, those supporting marginalized residents are also invigorated-liberated from predefined worldviews and modes of living and empowered-through residents’ pantheistic worldviews and solidarity with nature and their discovery of wisdom in living. This sense of solidarity then increases residents’ self-esteem, paving the way for methods of cooperation and support centered on self-help, which can also help ward off stigma.

Key words：生活支援ツール life-enhancing tool　ナラティブ・アプローチ narrative approach　協働 cooperation　連帯感 sense of solidarity

1. 本研究の目的

過疎問題を抱える集落が「限界集落」という言葉で表現されるようになって以降[1]、限界集落に関する議論が活発になっている。国は過疎地域への対策として、「まち・ひと・しごと創生基本方針 2018」を打ち出し、都市部から過疎地域の農山漁村への移住者を 6 年間で 6 万人にすることを目指し、地域おこし協力隊の拡充、UJI ターン者[3]の増加、あるいはその関係人口[2]の形成に力を入れている。

一方、これまでの地方政策、環境政策、政治経済学、人文地理学などの研究分野においても、村落が基礎的な地域単位として存続できないことを問題とし、地域おこし協力隊や UJI ターンに関する課題を議論の中心としていた。また、社会福祉分野では、住民の生活課題への対策を提案するというもの、あるいは、支援者のイメー

受付日　2020. 5. 19 ／ 掲載決定日　2020. 9. 4
*関西福祉科学大学　社会福祉学部　准教授
**関西福祉科学大学　社会福祉学部　教授
***椙山女学園大学　人間関係学部　准教授

ジする村落や住民の姿に適合する資質を引き出すための議論がなされてきた[4]。

しかし、現在、人が居住している地域の約 2 割が 2050 年までには無居住化するとされていること[5]、UJI ターン者などの資源にも限りのあること[6]、また、国全体の人口減少により、地域に対する国からの支援は困難になると予想されること[7]などから、今後、消滅を避けられない集落があらわれるとの認識[8]は、多くの研究者にも共有されているところである[9]。

消滅する可能性の高い集落へは、これまでのような集落の存続を念頭においた、そして、彼らの暮らしの周辺現象に焦点をあてた、いわば医学モデルのような支援[10]のみでは不十分である。

徳野貞夫や山下祐介は、人口的要因にのみに注目して集落の危機や再生を論ずる傾向への警戒をあらわしており[11]、片岡佳美は、住民の生の声を収集し、それらを分析する重要性について述べている[12]。また、渡辺裕一は、集落固有の伝統的な習慣や生活様式、価値、文化、住民のその人らしさを尊重する重要性[13]に言及している。

住民の中には、『「限界集落」と外から言われはじめた』と感じている場合もある[14]ことから、「限界集落」というラベリングをするのではなく、「ひとつの集落」ととらえること、そして、支援においては、支援者の価値観にもとづいた「あるべき村落や住民の姿」を目指すのではなく、ひとつの集落に生きる住民のその人らしさを尊重し、生活に寄り添うことが必要である[15]。

これは、消滅する可能性の高い集落に対して諦めるものを探していく[16]というものでも、いかに「むらおさめ」をしていくか[17]を考えるというものでもない。支援者の枠組みや価値観にもとづいた発想ではなく、ひとつの集落住民のありのままに寄り添うことで本来的な意味でのエンパワメントを目指そうとする支援方法への挑戦である。

そして、このための具体的な方法としては、これまでにも実践での実績がある生活支援ツールの活用と住民からの語りをもとにした集落史の作成を考えている。本来であれば、生活支援ツールを活用した限界集落住民に対するアセスメントの実施とその協働のなかで住民が語る地域への貢献や思いなどをもとにした集落史の作成という支援の実施結果について示したいところである。しかし、コロナウィルスの影響により地域住民との対面がかなわなかったことから、本稿では、文献研究をもとにした本支援方法の構想の根拠を示し、その可能性について考えたいと思う。

2. 生活支援ツール

(1) 生活支援ツールの概要

生活支援ツールは、利用者の生活を包括統合的に理解するために、システム思考と生態学的視座を統合したエコシステム概念をパソコンの活用によって具現化したものであり、利用者のアセスメントに用いることのできるツールである。この生活支援ツールには、対象者に応じたくつかのバージョンが開発されており、これらは実践場面で用いられてきている。本稿ではこの支援ツールについての詳細な説明は割愛し、概要のみにとどめることにする[18]。

図 1 は、一般的な生活の項目を表した生活支援ツール

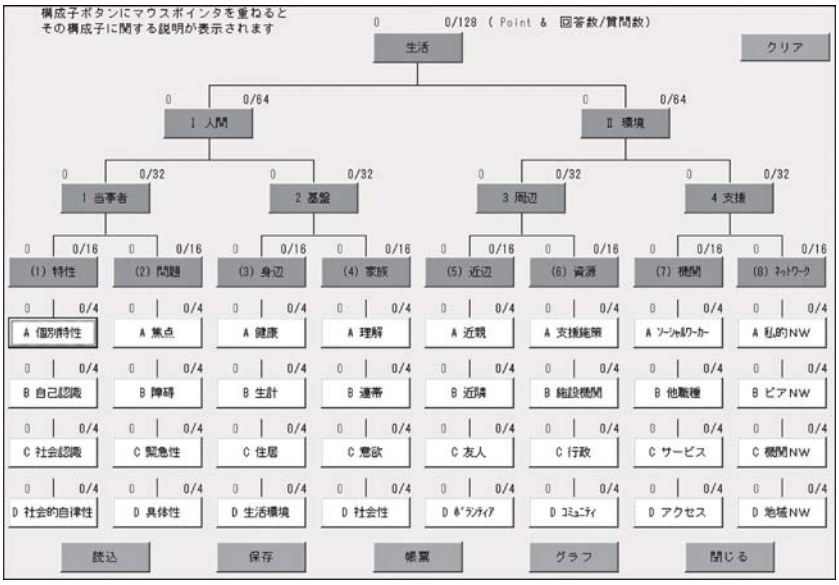

図 1　生活支援ツール画面

図 2　質問項目画面

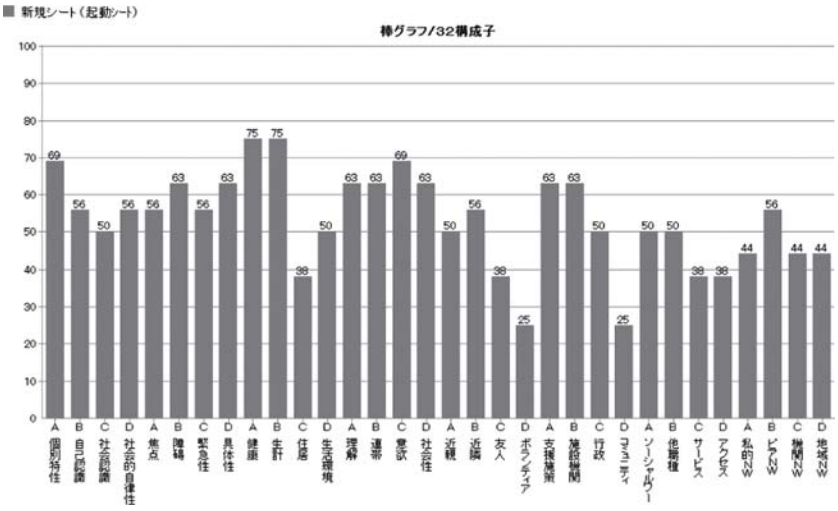

図 3　棒グラフ表示の例

のパソコン画面である。生活を人間と環境に分けたうえで、対象者の生活特徴に応じた項目が用意されており、そのひとつをクリックすると、図 2 のような質問項目が表示される。そして、これらの質問に情報を入力することで、それぞれの項目ごとのデータを棒グラフ（図 3）やレーダーチャート（図 4）などで表わすことができるようになっている。

生活支援ツールは、千差万別の人間の生活そのものをどのようにして表すかという課題に挑戦したものである。

(2) 生活支援ツールの特徴

① 生活のビジュアル化

本ツールの特徴は、生活状況をデータによってビジュアル化するという科学的な方法によって、利用者にとっては漠然としたものであった生活を視覚的に把握できるようになるところである。このことで、利用者は、生活を広がりとして実感することができるとともに、自身の生活を客観的に見ることができるようになる。

② 生活変容のビジュアル化

また、本ツールは、これまで入力した情報を蓄積できるようになっている。このため、アセスメントを繰り返

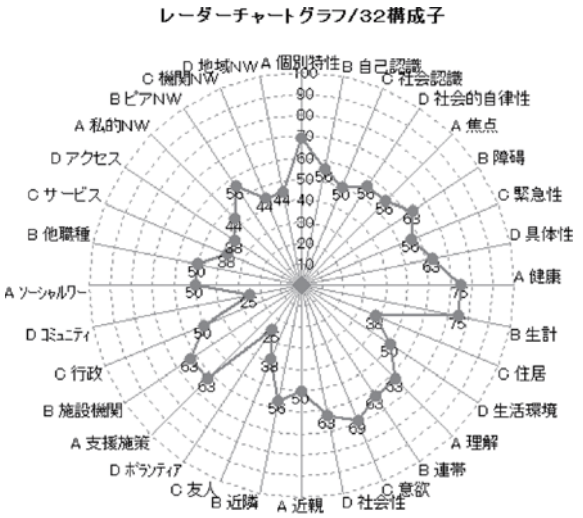

図 4　レーダーチャート表示の例

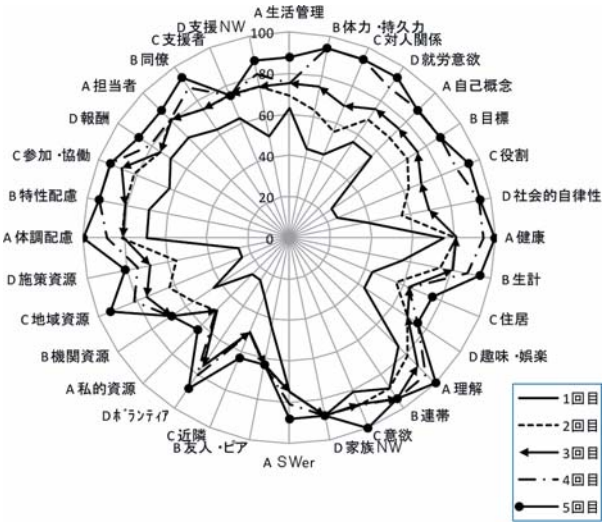

図 5　生活変容の表示例

す中でのデータを比較することで、生活全体の広がりの変容を感覚的にとらえることができ、また、生活のどの部分が変化しているのかといった詳細な部分についても具体的に見てとることができる（図 5）。

このように生活状況のデータをビジュアル化することで、利用者は生活を客観的に、そして重層的に見ることができるようになり、これまで気づいていなかったことへの気づきや具体的な課題の発見、さらには、その課題解決にむけた具体的な方法を考えることにつながるのである。

③　利用者とソーシャルワーカーとの参加・協働

また、本ツールは、ソーシャルワーカーが利用者の生活を標準的に判定したり判断したり、他の利用者と比較したりするためのものではない。

ソーシャルワーカーが見た利用者の生活として表されたデータを利用者に示す中で、なぜこのように入力したのかについて説明することを通して、利用者と話し合う。こうすることで、今まで自分では気づいていなかった部分に利用者が気づくことや、逆に、利用者からソーシャルワーカーの知らなかった情報が提供される場合もある。本ツールは、コミュニケーションをとりながら利用者の生活を理解していくためのものであり、ソーシャルワーカーと利用者の協働を促進するひとつの手段として用いるものでもある。

このように、生活支援ツールは、生活の広がりと時系列の変容をビジュアル化することで、利用者の生活への関心を引き出すとともに、利用者とソーシャルワーカーのコミュニケーションを通した協働を促進し、相互理解や利用者自身の理解、意思決定への過程に役立てようとしているのである。

(3) 限界集落住民に支援ツールを活用することで期待される効果

生活支援ツールによって生活情報をビジュアル化する効果については、これまでの実践から、具体的な生活課題の抽出を通して高齢者の低迷しがちな士気が高まり、課題解決・自己実現の達成、生きがいある生活が実感できるようになったことが確認されている[19]。

また、利用者が生活支援ツールを活用したアセスメントに参加する意義として、丸山裕子[20]は、①実践過程展開の主体としての自覚、②利用者が客観的な立場で自らの状況をふりかえる機会、③ソーシャルワーカーへの理解と活用、④セルフ・イメージの立体化、⑤主体的参加の結果としてのコンピテンスの向上と開発をあげている。

自信や意欲の向上に加え、具体的に整理したものでは、質的なものとして焦りの軽減、目標の具体化、量的なものとして自己理解の促進、利用者の情報の増加、また、空間的なものとして利用者とソーシャルワーカーの相互理解の促進、家族や支援者の理解の促進、利用者の環境への関心へのきっかけ、そして、時間的なものとして生活への関心、変化の検証、実感の形成、主体性の促進が確認されている[21]。

では、このような支援ツールを限界集落住民のアセスメントに活用することで、どのようなことが期待されるかについてである。

限界集落住民は、一人暮らしであってもその集落に住み続けたいと思っている場合が多く[22]、高齢化が進んだ集落では、地域への思いは一層強くなるとされている[23]。しかし一方で、もうどうしようもないといった諦めの気持ちや喪失感[24]、あるいは、自分の人生が社会的

に報われないといった感情や[25]集落に対する否定的な気持ち[26]についても報告されている。これについて、片岡佳美は、過疎や高齢化の影響は集落の維持・存続よりも先に住民の意識のほうへ及ぶ可能性に言及している[27]。

しかしながら、曽根英二は、住民との会話の中で「冬のあいだはとてもわしの手で百姓はやれないと思うのだが、春になって野良に出てみると、なあにこれくらいの百姓はという気になる」といったエピソードにも触れている[28]。これは、春の明るさや温かさを感覚として感じるといった少しのきっかけによって、住民の意識にも変化が起こる可能性を感じさせるものである。このようなことから、支援ツールによってビジュアル化された生活状況を客観的に見ることを通して、自分の生活を実感としてとらえること、そして、少しでも生活に変化があればその変容を視覚的にとらえることは、集落住民にとって、今後の意欲の向上につながるきっかけとなるのではないかと考えている。

また、アセスメントにおける住民との様々なコミュニケーションから、これまでの集落での生活の様子や集落全体の歴史といった内容についても自然な形で聞き取ることが可能になると予想される。このことから、集落住民とのアセスメントで聞き取った内容を集落史作成の際の材料にすることが可能となるであろう。

本支援では、協働にもとづいた生活支援ツールの活用によって、住民の意欲をとりもどすきっかけをつくるとともに、集落史作成にあたり、材料を収集する際の聞き取りの枠組みとして支援ツールを用いることができると考えている（図 6）。（御前由美子）

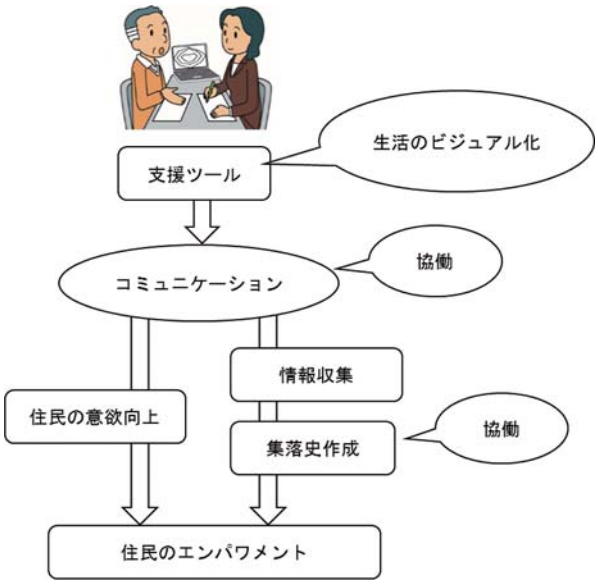

図 6　支援ツールを活用した限界集落住民支援の構想

3. 支援ツールを介した対話における ナラティブ実践研究の意義

(1) 社会構成主義に基づくナラティブ実践研究の概観

ソーシャルワーク実践におけるナラティブによる利用者支援は、モダンからポストモダンへと移行する思想的潮流のなかで、「現実は社会的に構築されたもの」「現実は人と人との対話を通じて作られるもの」という認識論である社会構成主義の理論的枠組みとともに定着しつつある。これにより、利用者の生活世界という固有な現実は、論理性・客観性・普遍性を重視する科学的方法を志向した支援が主流であったのに対し、利用者と支援者の対話から構築される相互主観的なものであるという認識に基づく理解と支援へ変化してきた。西梅幸治[29]は、社会構成主義に基づく実践として、無知のアプローチ、リフレクティング・チーム、ナラティブ・セラピー、解決志向アプローチを挙げ、エンパワメント実践にも多大な影響を与えていることに言及している。また、熊谷忠和[30]は、ハンセン病当事者のライフストーリーの聞き取りと検討により得られた知見から、エンパワメントアプローチ、ナラティブ・アプローチ、解決志向アプローチの他に、実存主義ソーシャルワークも社会構成主義ソーシャルワークとして捉えている。

また、ソーシャルワークの実践研究においては、結城俊哉[31]により、口述史（オーラルヒストリー）研究、生活史（ライフヒストリー）研究、ライフストーリー研究の全体を統合する概念としてナラティブ（語り）研究が位置付けられている。口述史研究は、「対話によるインタビュー調査の『語り（口調も含めて）』をそのまま尊重し、記述することでその個人が自分に生きた歴史を証言者として人生を回想する物語である」とし、生活史研究を「録音記録（逐語記録）をベースに、その個人をめぐる基本情報となる日記、手紙、さらには地域社会（コミュニティ・風土）の歴史的資料等も合わせて参考にしながら、語り手の生涯を社会状況と連続する文脈化への編集がなされるもの。つまり、個人的生活の過去から現在までのライフサイクルを基盤として語られる社会的存在として生きる個人の人生物語を生活史という」としている。また、ライフストーリー研究は、桜井厚氏の引用から「自己の生活世界や社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」であると述べている。そして、口述史は「歴史的状況下における庶民の視点から語られた〈歴史証言〉」であり、生活史は「ライフサイクルによるライフイベントを基点として時代の中で生きる人間の〈歴史的記録（個人誌）〉」、ライフストーリー研究は「基本的には個人の〈生活世界（語

られた物語)〉を研究対象とする」と整理している。

このライフストーリー研究の展開方法として、塚田守[32]は、「アクティブ・インタビュー」を示している。アクティブ・インタビューは、語り手が単なる「回答の容器」ではなく、アクティブなエージェントであり、インタビュアーと共同で調査のトピックを手掛かりにその調査状況や自分の経験を基に物語を語ると述べている。そのためには、インタビュアー自身のアイデンティティが語り手にとって語る物語を方向付けること、インタビュアーが背景知を使うことで語りを生産的なものにすること、インタビュアーが自分自身をインタビューに投入させることといった点を認識することが重要であるとしている。

また、ライフストーリーを実践に援用した方法として、才村眞理[33]や曽田里美[34]は、「ライフストーリーワーク」を挙げている。様々な理由で出自や養育過程を理解していない社会的養護を要する子どもを対象に、支援者と子どもの協働による生い立ちの整理作業、人生を紡いでいく作業であり、換言すれば「真実告知」にむけた参加と協働による作業ともいえる。起源は、1950 年代、イギリスにおいて里親委託や養子縁組の準備段階で、子どもの生い立ちを「自分史」「歴史」「生活史」として作成してきたことにあり、児童法により社会的養護を要する子どもたちに対しライフストーリーワークが義務付けられている。子どもの知る権利を擁護する方法であり、その作業過程はソーシャルワーク実践の一部[35]と言われている。さらに「精子・卵子の提供により生まれた人(子ども)」や「就職前の事前学習を要する学生」、「介護老人保健施設に入所する高齢者」のように、対象を広げた実践報告も散見される[36]。

このライフストーリーの欠落部分に架橋する方法として示されているのが、高松里[37]の提唱する「ライフストーリー・レビュー」がある。これは「これまであまり語ってこなかった過去の経験について、他者の協力を得ながら光を当て、言語化を行い、その経験の意味を考えること」を行うための方法であり、「留学生が異文化経験をどう語るのか？」という発想から発案されている。セラピー機能は想定されていないものの、先述したライフストーリーでは触れることができない部分や、どう考えて良いか分からない部分があると人の心は不安定になることから、その部分について少しずつ言語化を行う特徴がある。

以上のように、社会構成主義に基づくナラティブ実践研究は、当事者に寄り添った利用者志向の理解や支援の方法としてソーシャルワークやその周辺領域において意義ある方法として拡がりをみせつつある。次節では、こうしたナラティブに基づく実践研究の意義について整理していきたい。

(2) ソーシャルワークにおけるナラティブ実践研究の意義

ナラティブ実践研究の意義については、先行研究による治療モデルと相対化した考察を基に以下の 4 点に着目し整理した。

① 利用者の生活世界への理解
② ソーシャルワークの支援過程の展開
③ 利用者と支援者の協働
④ 利用者と支援者の相互作用によるストーリーの組立てと意味づけ作業
⑤ 利用者のストレングスの発見と活用によるエンパワメント実践

①利用者の生活世界への理解とは、主にアセスメントやエバリュエーションにおける利用者理解（の評価）についてである。山口圭[38]は、一つの論理により組み立てられ、一部を加除すると全体の整合性が失われるため、すべてのチェック項目を埋める必要のある MDS-HC のような普遍性・客観性・論理性を重視するアセスメントツールが利用者の生活世界と乖離した理解を導く方法であることを指摘し、ライフストーリーや観察技法と調査技法と連動した生活場面面接等の質的調査技法を活用しながらアセスメント結果を外在化させ、客観性を担保する利用者理解の方法の再構築を提案している。つまり、客観的な事実としての利用者理解を重視しながらも、それは利用者の実感に伴い語られる生活状況、生活課題でなければ意味がないという問題の指摘である。そのためにも利用者との関係づくり、ラポール形成段階から利用者が選択的に語る人生の意味あるストーリー、すなわちライフストーリーを丁寧に聴き、過程叙述体で面接記録することの意義を述べている。

②ソーシャルワークの支援過程の展開について、結城[39]は、ナラティブ実践研究が、ソーシャルワーク支援過程におけるアセスメント機能、すなわち、利用者の「経験」=「体験的事実」を通して利用者の生きてきた歴史を理解、現在の生活問題の成り立ちを重層的、包括的に理解する方法であると示唆している。また、その生活史をめぐるアセスメントが、ナラティブとして言葉によって語り、語られた物語を生成し支援者との協働作業を通じて再編成・再編集されながら、利用者の人生のシナリオに描かれた意味が次第に明確化され、パーソナリティの統合化にむけた可能性を含むことから、カウンセリ

ング、ケースワーク、グループワーク、コミュニティワークといった介入方法にもつながると述べている。さらに、利用者の生活史をめぐるアセスメントから、地域特性とそこで暮らす住民の暮らしぶりを手掛かりとして、コミュニティの歴史的状況を解明し、生活課題を解決・改善する具体的な地域課題、ソーシャルアクションを含む施策的対応の内容を導くことができるとしている。

③利用者と支援者の協働とは、ナラティブが、これまでの治療モデルによる支援者側の権威的な立場に基づく支援枠組みではなく、利用者に寄り添ったパートナーとしての立場から支援過程に参加し協働での展開を可能にしていることについてである。例えば、ライフストーリーワークやライフストーリー・レビューでは、支援者と利用者の共同作業によるライフストーリーの語りが前提にあり、必然的に行われる両者による過去、現在、未来を循環する対話を通じたワークやレビューそのものが、参加と協働によるソーシャルワークの支援過程を展開していることにもつながる。その効果は、利用者が子どもの場合は、自らの過去を理解し、しっかりとした将来を考え築く機会の確保、アイデンティティの獲得等、高齢者の場合は、これまでの生きてきた意味や生きがいへの理解、人生を通じたパーソナリティの統合化が示されている。そして、どのような利用者においても共通して利用者と支援者間のより良いパートナーシップの構築と利用者の主体性の尊重が挙げられている[40]。

④利用者と支援者の相互作用によるストーリーの組立てと意味づけ作業とは、ナラティブの特性であり、最大の関心事、目的でもある。過去や現在、未来を語る際に自分のパターン化した解釈にもとづくドミナン・トストーリー（支配的な物語）から、1つの解釈による単なる物事や出来事の事実のみでなく、その物事や出来事の前後にある社会的・文化的コンテクスト、その物事や出来事が自分の人生や生活に与えた影響は何か、といったストーリーの組立てや意味づけを支援者と利用者との対話による相互作用を通じて探索し紡いで生成し、前とは異なったオルタナティブ・ストーリー（もう一つの物語）の展開を意図した作業である。この作業過程には、聴き手である支援者のアイデンティティが話し手である利用者の語りに大きく影響を及ぼすことが明らかになっていることから、誰に語るかによってストーリー内容が変化することを前提としている。

⑤利用者のストレングスの発見と活用によるエンパワメント実践について、結城[41]は、人は誰かに自分を語ることを通して、自分の「生（ライフ：人生）」の意味を見出し、自分自身を変革し、世代を超えて他者との関係に自己の意味を再発見していくことでエンパワーがなされ、予期しない出来事に直面してもリジリエンスを発揮する意味づけ作業が可能になると述べている。また、ライフストーリーワークでも、子どもの「知る権利を守ることは、主体性のある力（エンパワメント）を与えること」[42]とされていることから、ナラティブ実践研究は、利用者だけでは気づくことのできていない、語ることのできないストレングスを活かした生活世界への新たな意味づけ、価値づけを創造するエンパワメント実践であり、その意義は大きいといえる。

以上の通り、ナラティブ実践研究は、利用者の主体性を最大限に発揮させる利用者志向のソーシャルワーク実践であり、それはミクロ、メゾ、マクロを循環するジェネラル・ソーシャルワーク実践を可能にする方法としても意義があるといえる。

(3) 支援ツールを介したナラティブ実践研究

ここでは、前章で示された支援ツールを介して展開されるソーシャルワーク実践における利用者と支援者の対話にみるナラティブに焦点をおき整理していく。

支援ツールは、前章で述べた通り、生活を包括統合的に理解する手助けをするツールである。それは、前述したMDS-HCのような科学性を有する特性もある。しかし、アセスメント結果をそのまま鵜呑みにするわけではなく、あくまでその情報収集過程はいうまでもなく、アセスメント結果を可視化させ、利用者と支援者で共有すること、そして、その共有過程で生まれる利用者と支援者の対話を通じて利用者の語られた物語の意味づけを理解すること、それがドミナントストーリーであればオルタナティブストーリーへの再構築を模索するといった実践へと展開するためのツールである。

加えて、ナラティブ実践研究の限界ともいえる「個人が認識し語る物事や出来事」に限定されない、すなわち一人では気づくことのできなかった生活世界の広がり（俯瞰）や奥行き（時系列）をも新たに発見すること（アセスメントすること）ができる。佐藤豊道[43]は、アセスメントにおいて「情報が散逸されないように」、「予め記録様式として定式化」することの重要性を唱えているが、生活情報を網羅した質問項目により成り立つ支援ツールであれば、こうした点へも配慮できる。支援ツールの入力や可視化された結果を基に、語り手の利用者だけでなく、聴き手の支援者にとっても偏りのない視点でストーリーに耳を傾け、対話を紡ぐことができるのである。

また、支援ツールの可視化された結果は、加点法アセスメントの特性も持ち合わせていることから、ストレングスを見出しやすい特徴もある。また、自己について語

ること自体が自己肯定をもたらし、外在化されたストーリーを聴き手である支援者に理解され承認されることは、すなわち自分自身の人生を批准されたと認識できる場でもある[44]。この一連の流れは、ストレングスを見出し活かすことでエンパワーされ、レジリエンスを発揮することにつながるといえる。つまり、どのような状況下でも、これまでの体験を生かした主体的な問題解決過程を可能にし、コンピテンスを高めることへとつながるのである。

こうした意義を踏まえ、限界集落の住民と支援者が支援ツールを介して対話をすること、その対話を生活史、集落史へと落とし込む作業過程は、ソーシャルワークそのものとも考えられ、これまでの「限界集落」という言葉がもつレッテルから抜け出し、新たな意味づけで語ることを通じて、住民個々人の自尊心だけでなく、集落全体のエンパワメントへとつながり、ひいては他の「限界集落」といわれているコミュニティへのエンパワーにもつながるのではないだろうか。

以上のように、ソーシャルワークの科学性と実存性をうまく統合させる方法の手段として支援ツールの結果を介した対話は効果的であり、ナラティブを無理なく展開できるのではないかと考える。（小榮住まゆ子）

4. 考　察

(1) 生活支援ツールの核心

本稿では、これまで「限界集落」という用語のスティグマ性、それを住民の側から問い返すための方法のひとつとしての生活支援ツールの意義について述べてきた。そして、ナラティブ実践研究にこのツールを併用することで、さらに幅広く「生活」にアプローチできることにも言及してきた。

これまでこのツールは科学的な支援方法という文脈で述べてきたが、ここでいう「科学」を本稿では、立場や視座、関心の焦点などを共有し「体系的な整合性をもって」[45]知識を分かちあうための枠組みとして広義に理解したうえで、本節では、まずこのツールの核心は何なのかを考えてみたい。

久保紘章は、大学で当事者を講師として招いてはなしをきくという授業を担当した経験から「オリエンテーションはやはり必要」[46]だと述べている。つまり「ここは聴いてほしい、ここは大事ですよ、といった意味づけというか、価値づけ」[47]があった方が聞き手の心に響くというのである。この指摘をふまえると、生活支援ツールの核心は「生活」をビジュアル化してみせることに加えて、聞きどころを示すクエスチョネア（questionnaire）にもあるといえる。あえていえば、そのような質問のリストをどう作るのか（作成者の立場）が、このツールの生命線なのである。

(2) 限界集落住民への支援における本研究の視座

そこで、本研究ではどのような支援をめざすのか（筆者らの立場）を明確にする目的で、これまで概観してきたナラティブ実践研究との比較検討を試みたい。

① エンパワメントの相互性

前章では、山口が、客観的な事実を重視しながらも、利用者の実感に伴い語られる生活状況、生活課題を重視し、利用者との関係づくりの段階から利用者が選択的に語る人生のストーリーを、過程叙述体で面接記録することの意義に言及していることをみてきた。

真木悠介は「私は人間の生き方を発掘したい。とりわけその生き方を充たしている感覚を発掘してみたい」[48]と述べている。それは「自然とか宇宙のうごきにたいする感応の深さやゆたかさが（それに呼応して存在する客観的世界のゆたかさ－道具や道や集落や都市のありようと共に）そのいくつかの質的な次元において喪われたとき、きりつめられ貧困化された感性と理性とは、それなりで自己充足的な明瞭さの空間を張って安住し、通常は喪われた諸次元について思いをはせることもない」[49]からである。したがって「反近代主義者たちのように近代を否定するためにではなく、〈近代〉をもまた来たるべき世界のための一つの素材として相対化し、あらたな生命をふきこんで賦活することのためにも、こんにちこの作業は必要なのだ」[50]とその意義を説明している。

この立場を援用すれば、人間の生き方や生き方を充たしている感覚（感性）を「発掘」することをとおした賦活（エンパワメントあるいは解放）がテーマとなるような研究が構想されうる。この立場では、利用者との関係のなかで実感をともなった「生活」のはなしを聞くことの意味は、利用者への支援というよりは支援者が「賦活」されることにある。つまり、わたしたちが解き放たれることによって、利用者も話す意義を感じて恩恵を受ける、そういった援助される側が援助する者を援助することによって力づけられる[51]というセルフヘルプ的なアプローチを本研究は志向している。

たとえば、ダムでもうすぐ沈む徳山村の「ジジババ」をたずねた著書『水になった村』のなかで、著者の大西暢夫は「水の底にも生きているように、僕の中にも徳山村は永遠に生き続けるのだ。だから僕はまた会いに行こうと思う。あそこに行くと、すべての自信を取り戻すことができるのだ」[52]と述べている。ここでエンパワメント（賦活）されているのは著者の側である。

もちろん「限界集落」というスティグマに傷ついてい

るひともいるだろう。しかし、援助する側が賦活されれば、そのことによって援助される側も自信（自尊心）を取りもどす可能性がある。エンパワメントとは、本来、相互的なものなのではないだろうか。その意味では、今の支援論は傲慢だと考えられる。

本研究のテーマに即していえば、エンパワメントに関する論点はつぎの3つになるだろう。

1）生きた証しを共有するというエンパワメント

「きっと大木になって桜が満開になるころには、わしら夫婦もこの世におるかおらんかわからん。わしらがおらんからといって、徳山村の歴史が終わってしまうわけではないと思っとる。『証し』やなァ。人が住んどったという。その植えとるところを大西さんに見せたかったんや（著者の大西はカメラマンである）」[53]

2）わたしたちを「とらわれから解放する」というエンパワメント

「徳山村の人たちの仕事を撮るということは、生活を撮るのとおなじことなのだ。僕はその生活に魅力を感じてしまった。僕の年代で言うのもヘンなのだが、人間らしくみえるのだ。（中略）僕が父親の年齢になったとき、どんな生活の知恵が残っているのだろう。（中略）ダム一つのために、まぼろしの村にしたくない。（中略）たとえ湖になってしまったとしても、写真を手に伝えていくつもりだ」[54]。前述した真木のことばを借りれば、徳山村のジジババの「生き方や、生き方を充たしている感覚」、たとえば生活の知恵の詰まった生活様式や生活そのもののゆたかさなどに触れることで、日頃の生活に染みついた「生活とはこういうものだ」というとらわれから解き放たれたのだと考えられる。

3）スティグマタイズしている人たちを「とらわれから解放する」というエンパワメント

なくなりそうな集落は救うべき、と考える支援者側の思考をノーマライズし、とらわれから解放するという意味でエンパワメントだと考えられる。ターミナルケアにはすでに40年近い歴史がある[55]。集落の栄枯盛衰も世の常であろう。それなのに集落への支援には、それに相当するものが見当たらない。援助する側は進歩、発展、成長といったドミナントストーリーを対自化してみることが必要だろう[56]。

② 意味への疎外と共感

前章において、熊谷は実存主義ソーシャルワークも社会構成主義ソーシャルワークとして捉えていることを概観したが、この点についてつぎに議論したい。

まず実存主義自体が一枚岩ではない。ここでは、カミュ（Camus, Albert）の実存思想についての概観からはじめたい。

カミュは「ぼくは生きるのが好きだ。笑うのが好きだ。喜びが好きだ」[57]とか、「今でもまだ、超満員の競技場での日曜日の試合と、他の何よりも情熱的に愛した演劇とが、自分が無垢であると感じられる世界で唯一の場所だ」[58]と述べている。ノーベル賞授賞式の演説では「私はこれまで自分がそのなかで育ってきた光、生きるという幸福、自由な生活、それを断念することはけっしてできませんでした」[59]と語っている。

中条省平は、こうした「古代ギリシャ人の、自然と調和した汎神論的な世界観への共感と憧れは、地中海人カミュの精神と肉体の根底に息づくもののような気がします」[60]と述べている。

真木はインディオのシャーマンであるドン・ファンのつぎのことばを紹介している。「知者は（中略）行動そのものによって生きるのだ。（中略）そこで彼は無心に眺めたりよろこんだり笑ったりするし、また見たり知ったりもする。（中略）生活はそれ自体として充全だ。みちたりていて、説明など必要とせん」[61]。そして、このことについて「ドンファンが知者の生活を『あふれんばかりに充実している』というとき、それは生活に「意味がある」からではない。生活が意味へと疎外されていないからだ。つまり生活が、外的な「意味」による支えを必要としないだけの、内的な密度をもっているからだ」と述べている[62]。

このことはつぎのような考察を導くだろう。「たとえば貨幣というものによってあらゆる個別の価値が通約され、決済され、一次元化される「世界」と、時間は時間、原野は原野、海は海、生命は生命といった、けっして決済され抽象化されることのない個別の価値の次元性のあやなす「世界」と。このすれちがいは、インディオの生きる世界から、薬用植物の「使用法」についての情報だけをすくってもち帰ろうとするカスタネダと、植物について知ることはその植物と友だちになり、その植物と生きる世界を共にすることだというドン・ファンとの、前提のすれちがいと対応する。小さな植物にひざまずき、カラスの声に予兆をききとって畏れるドン・ファンの共感能力があれば、水俣病は起こらなかったはずだ。人間主義（ヒューマニズム）は、人間主義を超える感覚によってはじめて支えられうる。水俣病とは、「わたしたち自身の中枢神経の病」（石牟礼道子）に他ならない。私たち自身が水俣で、そしてまたいたるところで病んでいる。視野狭窄と聴力障害。言語障害と平衡感覚の失調。テクノロジーの獲得した巨大な視界と対応能力は、喪われた視界と対応能力をけっして補償していはしない」[63]。

ここで「意味への疎外」「わたしたち自身の病」と対

比して述べられているのは「共感」である。カミュも『ペスト』の物語が終盤にさしかかったところで「誰でもめいめい自分のうちにペストをもっている」[64]と書き、心の平和に到達するためにとるべき道は共感だと述べる[65]。

この自覚からカミュは「神も理性も信じていない時に、人はどのように行動しうるか」[66]という問いを立て、「誠実さ」「自分の職務を果たすこと」[67]と答える。そして、このような行動ができる人間のことを「紳士（l'honnête homme）」と呼び、「おのれが存在することの正当性を一瞬たりとも疑わない人間、『自分の外部にある悪と戦う』という話型によってしか正義を考想できない人間」[68]この表象がペストだという読み方も可能）への「反抗」（ノンと言うこと）を志向するのである。この点も真木が述べていることと呼応しているだろう。共感によって内なる病を自覚することは、それに対峙する契機となると考えられるのである。それは人間にとっての尊厳を発見していくことでもあるだろう[69]。

そのようなカミュの感性について内田樹はこう述べる。「気分が片づかないんだ、おれは！」とどっちつかずを行くカミュが、身体的感覚を頼りに思想体系の構築に挑戦したのが『反抗的人間』であり、基準はあくまで自分の身体がどう感じるか。だから、せっかく理路整然と積み上げたものも「何か違う」と違和感を覚えたら、ためらいなく壊してしまう」[70]。つまり、意味へと疎外されないためには、身体的感覚に開かれていることが共感とともに重要だという指摘である。

また、内田はカミュの「反抗」の方法について「自らに全的自由を叙権する抑圧者に対して、『それを限界づけ、それを阻止する』顔を向けるもの、すなわち『他者』から戒律は到来する。この戒律は、いままさに殺されようとしている人間の、それでも『殺そうとしている私』を見つめ返すまなざしから、『自らを放棄せぬもの、身を委ねぬもの、私を直視し返すもの』のまなざしから、訴えとして、祈願として、命令として、私に到来するのである」[71]と述べている。このことは、主体性や自己決定が相互的なものであり、ある人間が他者と切り離されたかたちでは存立しえないとする感性を示唆している。

カミュ自身が「私は実存主義者ではない」[72]「私は哲学者ではない」[73]と述べていることをふまえたうえで、これまでの議論をまとめると、本研究は、(a) 単独者の主体的で理性的な自己実現（サルトル（Sartre, Jean-Paul Charles Aymard）の実存思想）とは立場を異にしており、また、(b) 認知や意味といった側面よりも、身体、自然なども含めた相互に織りなす世界（そこにおいては絶対的な「主体」は存在せず、すべては相互的なもの）への共感を重視する（「無知」の姿勢をとらない）ため、一般的な実存主義ソーシャルワークや社会構成主義ソーシャルワークには必ずしも与しない。

また、結城が述べる、利用者の生活史をめぐる物語が「支援者との協働作業を通じて再編成・再編集されながら、人生のシナリオに描かれた意味が次第に明確化され、パーソナリティの統合化」にむかう可能性があるというアイデアを共有することもできない。そもそも利用者の人生を支援者側の「パーソナリティの統合」という枠組みで意味づけようとすること自体が「意味への疎外」であり、支援者が賦活される機会を遠ざけ、集落の住民をスティグマタイズさえしてしまいかねないと考えられるからである。また「コミュニティの歴史的状況を解明し、生活課題を解決・改善する具体的な地域課題、ソーシャルアクションを含む施策的対応の内容を導くことができる」という立場を採ることもできない。本研究の立場は前述したセルフヘルプ的支援にあり、この方法をとおして限界集落とされた集落で暮らす人びとの抱えている困難は、これまでの研究とは別の角度から（共感や病の自覚、連帯という契機で）照射されることになると考えているからである。

③　スピリチュアルな次元と交響する世界

結城はナラティブ実践研究を「利用者の生きてきた歴史を理解、現在の生活問題の成り立ちを重層的、包括的に理解する方法である」とも述べていた。

たとえば、真木はアメリカ原住民の悲劇をこう述べる。「白人が彼らを奪い、彼らを捕え、彼らを虐殺したことよりも以上に、白人による自然の破壊にたいしてゆるすことのできないいきどおりを抱いたという。それはキリスト教文明の人びとにとっての「神」よりもいっそう深い意味で、彼らの生と死とを支える大地だったのだ。その解体は彼らの生を奪うだけでなく、その死をも奪ってしまった」[74]と。前述した徳山村から別の街に移住したある老人もつぎのように語る。「ここの夢を一度も見たことがないんじゃ。見る夢は徳山のことばっかじゃ。」[75]と。それを受けて著者の大西は「人はどこにでも暮らせるわけではないと思った」[76]と述べている。

このことと呼応するように徳山村でひとり暮らしをしているハツヨさんは「なんにも怖くなんかない。ここのことは何でも知っとるもん！先祖もここにおる。神様もおる。みんなおるじゃない。何がさみしいの」[77]と語る。「『みんな街に行ってまったけど、徳山の神さまは今までどおりおってくれとる。わしにはそれがわかるんじゃ。きっと一番最後まで残ってくれるんじゃろな』そう言って手を合わせた」[78]。

これらの実例をふまえると、生活問題の成り立ちを重層的、包括的に理解するために必要なことは、自然やスピリチュアルな次元もふくめた世界体験への共感、多様性の尊重にとどまらず、世界そのものが単一の「世界」に収斂されないいくつもの「世界」が交響しているような世界観に開かれていることだと考えられる。

(3) 今後の課題

『ペスト』という長い記録の終盤あたりで、書き手である医師リウーは、ペストによる友人タルーの死に際してつぎのように書く。「タルーは勝負に負けたのであった－自分でいっていたように。しかし、彼、リウーはいったい何を勝負にかちえたであろうか。彼がかちえたところは、ただペストを知ったこと、そしてそれを思い出すということ、友情を知ったこと、そして、それを思い出すということ、愛情を知り、そしていつの日かそれを思い出すことになるということである。ペストと生とのかけにおいて、およそ人間がかちうることのできたものは、それは知識と記憶であった。おそらくはこれが、勝負に勝つとタルーの叫んでいたところのものなのだ！」[79]。

そして、記録を書く理由を「黙して語らぬ人々の仲間にはいらぬために、これらペストに襲われた人々に有利な証言を行うために、彼らに対して行われた非道と暴虐の、せめて思い出だけでも残しておくために、そして、天災のさなかで教えられること、すなわち人間のなかには軽蔑すべきものよりも賛美すべきもののほうが多くあるということを、ただそうであるとだけいうために」[80]と述べる。尊厳は、そもそもそこに存在していたのである。

本研究のテーマのひとつである集落史作成にとって鍵となることがら、知ること、記憶すること、記録すること、の意義については、エンパワメントに関する議論のなかで触れた、生活の知恵、証し、写真のほかには、魅力、連帯、共感などいくつかのヒント（聞きどころ）を示すことしかできなかった。他日を期したい。

また、コロナウイルスの感染拡大によって、当初計画していた集落でのインタビュー調査が実施できなかったため、今回は文献研究にとどめざるをえなかった。事態が収束したのち、本稿で述べた立場がどの程度妥当なのかも含めて研究を進めていきたい。（安井理夫）

注

1）飯田泰之、木下斉、川崎一泰他『地域再生の失敗学』光文社新書、2016 年、188 頁

2）農林水産省では、「大都市圏の居住者が地方に移住する動きの総称で、U ターンは出身地に戻る形態、I ターンは出身地以外の地方へ移住する形態、J ターンは出身地近くの地方都市に移住する形態をいう」としている。（農林水産省「平成 26 年度　食料・農業・農村白書」http : //www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h26/h26_h/trend/part1/chap0/c0_1_02.html）

3）関係人口とは、「移住した『定住人口』でもなく、観光に来た『交流人口』でもない、地域や地域の人々と継続的に多様にかかわる者」とされている。（総務省「令和元年度　地域緑創造グループ施策について」https : //www.soumu.go.jp/main_content/000676650.pdf）

4）御前由美子、安井理夫、小榮住まゆ子「限界集落論をめぐる現状とソーシャルワークに基づく課題－先行研究レビューを通じて」関西福祉科学大学紀要 23、2019 年、1-8 頁

5）国土交通省「国土の長期展望　中間とりまとめ　平成 23 年」http : //www.mlit.go.jp/policy/shingikai/kokudo03_sg_000030.html

6）林直樹「過疎集落からはじまる戦略的な構築と撤退」農村計画学会誌 29(4)、2011 年、418-421 頁

7）林直樹「山間地で求められる農村戦略」農村計画学会誌 34(1)、2015 年、51-54 頁

8）郷堀ヨゼフ、西尾孝司「実存・未来・福祉－中山間村落における地域福祉に関する一考察」淑徳大学社会福祉研究総合福祉研究 22、2017 年、169-182 頁

9）片岡佳美「集落の過疎・高齢化と住民の生活意識－島根県中山間地域での量的調査データをもとに」山陰研究 5、2012 年、29 頁

10）前掲論文 4）

11）徳野貞夫（監）牧野厚史、松本貴文（編）『暮らしの視点からの地方再生』九州大学出版会、2016 年、7 頁、山下祐介『限界集落の真実』ちくま新書、2015 年、240 頁

12）前掲論文 9）

13）渡辺裕一「限界集落の住民の生活や意識はどのように変わったのか：A 市 B 市における繰り返し横断調査データから」武蔵野大学人間科学研究所年報　第 6 号、2017 年、127-136 頁

14）曽根英二『限界集落　吾の村なれば』日本経済新聞出版社、2010 年、26 頁

15）前掲論文 4）

16）前掲書 1)、220 頁

17）作野広和「中山間地域における地域問題と集落の対応」経済地理学年報 52(4)、2006 年、264-282 頁

18）詳細は、以下の文献などをご覧いただきたい。太田義弘、中村佐織、安井理夫『高度専門職業としてのソーシャルワーク』光生館、2017 年、太田義弘、石倉宏和、中村佐織『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング－利用者参加へのコンピュータ支援』中央法規出版、2005 年

19）小榮住まゆ子『高齢者ソーシャルワーク実践の科学性と実存性をめぐる統合化研究－エコシステム構想と支援技術による実証的展開』関西福祉科学大学大学院　博士学位論文、2008 年、142 頁、松久宗丙『End of Life Care におけるソーシャルワーク実践－エコシステム構想を活用して

－』関西福祉科学大学大学院　博士学位論文、2013 年、89 頁など
20）丸山裕子「精神医学ソーシャルワークの実践課程とクライエント参加－その意義と方法」社会問題研究 47(2)、1998 年、165-196 頁
21）御前由美子『ソーシャルワークによる精神障害者の就労支援－参加と協働の地域生活支援』明石書店、2011 年、158 頁
22）前掲論文 13）
23）前掲論文 9）
24）前掲書 14）、21 頁、前掲論文 9）
25）大野晃『限界集落と地域再生』静岡新聞社、2008 年、31 頁
26）前掲書 14）、206-207 頁
27）前掲論文 9）
28）前掲書 14）、46 頁
29）西梅幸治「ソーシャルワークにおける社会構成主義の意義と課題－エンパワメント実践との関連から－」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』（第 67 巻）高知県立大学　41-55 頁　2018 年
30）熊谷忠和「当事者視点を基盤にしたソーシャルワーク援助に関する試論」『川崎医療福祉学会誌』（Vol.21 No.1）11-28 頁　2011 年、熊谷忠和・ティム・クレミンソン「生きることの有意味感を見据えたソーシャルワーク枠組みの検証」『川崎医療福祉学会誌』（Vol.28 No.1）55-64 頁　2018 年
31）結城俊哉「社会福祉実践における『ナラティブ（語り）研究』の可能性の検討－臨床研究における質的研究の方法論として－」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』（第 17 号）71-88 頁　2015 年
32）塚田守「ライフストーリー・インタビューの可能性」『椙山女学園大学研究論集』（第 39 号（社会科学篇）5-6 頁　2008 年
33）才村眞理「ソーシャルワークにおける子どもの自叙伝づくり」『帝塚山大学心理福祉学部紀要』（4）2008 年 31-44 頁及び才村眞理「福祉領域におけるライフスト－リーワーク実践の現状」『子どもの虐待とネグレクト』18(3）2016 年 295-300 頁により報告されている。
34）曽田里美「児童養護施設におけるライフストーリーワークの実態－アンケート調査の分析から－」『神戸女子大学健康福祉学部紀要』（5）神戸女子大学　2013 年 35-48 頁、曽田里美「児童養護施設におけるライフストーリーワークの取り組み－聞き取り調査を通して－」『神戸女子大学健康福祉学部紀要』（6）神戸女子大学 2014 年　59-69 頁、曽田里美「児童養護施設におけるライフストーリーワーク実践の現状」『神戸女子大学健康福祉学部紀要』（10）2018 年　35-45 頁により報告されている。
35）才村眞理「ライフストーリーワークにおける就職前の事前学習の意義」『手塚山大学教育学部紀要』（1）2019 年 66 頁
36）同論文 66-74 頁の他、才村眞理「精子・卵子の提供により生まれた人（子ども）のためのライフストーリーブック作成の試み」『帝塚山大学心理学部紀要』（2）2013 年 103-104 頁や『原祥子氏・沼本教子「老いを生きる人のライフストーリー：介護老人保健施設利用者における自己の人生の意味づけ」『老年看護学』8(2)，35-43 頁 2004 年の報告がある。
37）高松里『ライフストーリー・レビュー入門－過去に光を当てる、ナラティブ・アプローチの新しい方法』創元社　2015 年　2-5 頁
38）山口圭「ソーシャルワークの基本的技法とチェック項目方式によるアセスメントツールの乖離」『聖学院大学論叢』22(1）93-104 頁　2009 年
39）結城俊哉「社会福祉実践における『ナラティブ（語り）研究』の可能性の検討－臨床研究における質的研究の方法論として－」『立教大学コミュニティ福祉学紀要』第 17 号　2015 年　75-76 頁
40）前掲論文 30）及び 34）
41）前掲論文 39）74-75 頁
42）厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課監修「子どもの権利を擁護するために　児童養護施設での子どもとかかわるあなたへ」日本児童福祉協会　2002 年　67 頁
43）佐藤豊道『ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究』川島書店　2001 年　277 頁
44）前掲論文 32）2 頁
45）『大辞林 4.0』三省堂　2019 年
46）久保紘章『自立のための援助論　セルフ・ヘルプ・グループに学ぶ』川島書店　1988 年　183 頁
47）同書　184 頁
48）真木悠介『気流の鳴る音　交響するコミューン』筑摩書房　1977 年　28 頁
49）同書　10 頁
50）同書　11 頁
51）ガートナー、リースマン　久保紘章監訳『セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際』川島書店　117 頁には、このような援助機能は「ヘルパー・セラピー原則」として説明されている
52）大西暢夫『水になった村』情報センター出版局　2008 年　367 頁
53）大西暢夫『僕の村の宝物』情報センター出版局　2006 年　275 頁　（　）内は筆者
54）同書　248～249 頁
55）たとえば、柏木哲夫『生と死を支える　ホスピス・ケアの実践』朝日新聞社　1983 年、日野原重明『死をどう生きたか：私の心に残る人びと』中公新書　1983 年などを参照
56）廃墟である軍艦島や閉山した石見銀山などは、その歴史を含めて世界遺産に登録されている
57）オリヴィエ・トッド、有田英也・稲田晴年訳『アルベール・カミュ〈ある一生〉下巻』毎日新聞社　2001 年　406 頁
58）同書　303 頁
59）中条省平『NHK テキスト　100 分で名著　アルベール・カミュ　ペスト　生存を脅かす不条理』NHK 出版　2018 年　107 頁（出典は『カミュ全集 9』所収、清水徹訳、新潮社）

60）同書　6～7 頁
61）真木悠介　前掲書　131 頁
62）同書　131 頁　前述した久保紘章も、当事者同士が心を通わせる様を目の当たりにして「『わかる』ことの外側に自分がいる、という感じを強くもった」（前掲書 46）99 頁）と述べている。この文章からは久保の簡単にはわかろうとしない（意味へと還元しようとしない）覚悟のようなものを感じる
63）同書　40～41 頁
64）カミュ、宮崎嶺雄訳『ペスト』新潮文庫　379 頁
65）同書　376 頁
66）オリヴィエ・トッド　前掲書　408 頁
67）カミュ　前掲書　245 頁
68）内田樹「20 世紀の倫理－ニーチェ、オルテガ、カミュ」http : //blog.tatsuru.com/2020/03/02_1756.tml（2020 年 5 月 7 日確認）
69）オリヴィエ・トッド　前掲書　202 頁には「真の反抗的人間は自己の尊厳を保ち、屈辱を拒否するものだ」という記述がみられる。
70）「【イベントレポート】仏文学の難解に挑め！内田樹×鹿島茂による丸わかりサルトル＆カミュ」https : //note.com /allreviewsjp/n/n1a338d54d8ba 2019 年 6 月 7 日
71）内田樹　前掲ブログ
72）オリヴィエ・トッド　前掲書　361 頁
73）同書　408 頁
74）真木悠介　前掲書　143 頁
75）大西暢夫　前掲書 52）　359 頁
76）同書　359 頁
77）同書　364 頁
78）大西暢夫『おばあちゃんは木になった』ポプラ社　2002 年
79）カミュ　前掲書　431 頁
80）同書　457 頁